ishoken gallery Interview

# Sato Masayuki
## 佐藤 雅之

2022年9月にishoken galleryで展覧会を開催した卒業生の佐藤雅之さん（第38期デザインコース修了）に話をお聞きした。

---

―― 展覧会が始まりましたがどんな心境ですか？

まずは無事終わってほっからしたという気持ち。美濃という地で個展をするということは色々な意味でプレッシャーがあって、まして中自分の新しい仕事を大々的に発表する場なわけだから。それでも自分なりにこれからの方向性を示唆するような作品を作って展示してもらいました。

―― 今回展示していただいた作品はどの様なことを考えて制作されたのですか？

作品をつくるのにカップコットはのをやめることです。以前の記憶を使って制作していた作品は、簡単に言うと掘象を自分なりにアロデュースして形にしていました。今回はそれを一切捨てて自分の手の中にできるものを優先ちがに作品を制作しました。やきものの目分の知らない部分がどうしても出るから取ずかしい部分もあるけど、それを見て自分自身が好きなことを改めて発見しました。

ishoken gallery での展示

―― そもそも佐藤さんがきやものを始めたきっかけは何ですか？

最初はとにかく美術がやりたくて、美大受験で引っかかったのがム年ゲの陶磁コースだったけで、他素材が多属やFRPを使ったり色々なことをしていました。それに対より自分の知らない世界を知りたくて、バイトして金が溜まったら卒業で日本中を旅して、金がなくなればその地でバイトしてみたいなことをしていました。でもある時、自分は何をやっているんだろうって思ったんですよね。ちょうど将来のことを真剣に考え出した頃に、知り合いの紹介で手伝ってスキに粘土触ったら面白くて、そこ初めてやきものを真剣にやりたいなと思いました。改めてやきものを勉強できる場所を色々と調ぶって、瀬戸と京都と滋賀県を受けたけど全部落ちちゃってて・・・でもある日突然「デザインコースでもえんですか？」って中島勤先生から誘り上げ自分の電話がかかってきたんです。

*武蔵野美術大学短期大学部

―― ishoken に入ってどうでしたか？

当時のishokenは、地元の瀬戸所の意子が多くて、「あんた何しに来やーた？」って聞け一番言われて、こんなところに食えないやきものをどこに売でどうするのみたいな感じだった。俺からしたら「やきもの一天国」をこわからやるって所に何を言っているんだ！って。

―― 特に印象に残っている授業はありますか？

中島先生の『円柱デッサン100枚』。眼鼻の先を知ることができた授業だった。あと授業というか・・・2年生の時に愛知と九州でIAC の国際会議があって、授業休んで仲間4人と会議で野宿しながら勝手について回って参加したこと。あの刺激は大きかった・・・。でも結局色々な刺激を受けながら自分が何を作るんだってなって、何が自分の中で面白いと感じて形にしようとしるものしたのは卒業制作です。

―― 卒業制作はどんなことをしたんですか？

卒業制作は泥漿を使った作品に取り組みました。泥漿が床に落ちたのを掃除したことがきっかけだったんだけど、床に付着した部を見えている面の違いがなんか面白いと感じて、表と裏両方見せる作品をつくればいかなっていうのがきっかけです。

―― そこからその後の作品につながるんですね。卒業後はどうしようと考えていましたか？

漠然とやきものは続けていきたいと思っていたけど、2年生になってる月から月くらいかな、中島先生と前田勝先生に呼ばれて、手伝勤助と製陶所に見学に行かされて、でっきこに就職した。仕事の内容も良かったし、何より一番魅力的だったのは会社が作品制作を応援してくれて、仕事が終わった後に自分で制作できる場所と窯があったこと。オブジェを作っていくにはちゃんと経済力も必要だったから。

研究生に授業をする佐藤さん

―― 就職先ではどんな仕事をされていたのですか？

食器のデザイン。そこはタクラ成形を特殊な成形方法で量産できるようにした食器メーカーで、型から金型一通りつくらないといけなくて、タクラ限定ではあったけどそれが感に面白かった。その頃から、どんどん陶器のメーカーがデザイン室を作って意匠部からデザイナーを入れようとになった時代でした。ただデザイナーって実際には未知に大変で、自分のつくったものの会社が圧有するわけだから、それに結局使えるものがいいものみたいな感じで、結局ものに合うものを、だからデザインが出てくも出来きがいいものじゃないというのが現実にあって、売れるものを作るにはどういうものが一番いいのかということはずこ勉強したから、自分が作りたいものをつくるだけじゃやっぱりダメなんだって。結局夢捨てるものるからつくりやすいっていうことに考えてデザインしなければいけないし、現場がそ同じようにデザインしなきゃいけない、しかも売れる側にしなきゃいけないわけだし。

―― 現場があるようこうさせたがすごい作品制作もできたんですか？

できないよ。最初の頃は、見本市の商担からの依頼も色々あるからやっくらないといけなくて、常に頭の中がデザインでやってると回っているから。休みの日になると何かセンドに作るようになるのかいって指に出て色々なものを見て情報をインプットしていました。

―― 何をきっかけに作品を作ようとするようになりてか？

公募展に向けてやってること。それがあるからなんとか問題を作って制作していました。特に意匠研の同期が公募展で大賞取ったりするんだって思って・・・自分もやってなんとか賞取りたいっていう思いでつくり続けていました。それに付随の作品が嬉しかったからそれがたんとやっちゃいかの。現場のある作品をつくっていたら引っ張られていたからもしたかな。

―― 泥漿の作品のお話がありましたがどの様に今回の作品に繋がっていくのですか？

泥漿を使った作品は20年くらい続けていて、結局その泥漿に頼るのやめたっていうことが一番大きい変化。泥漿に含まれるものが所で密が作れるっていうことに気かれて制作をしてきたけど、泥漿だけじゃなくてきないお表現がからその制約が廃棄になってきたんです。だからもっと自由な形をつくりたいというとそその型を自由にできるものに変えてみたりとか。今回のテーマの電話ボックスがいっていました。

―― 手捻りで制作してみてどうですか？

自由につくれる開放感みたいなことが大きいかな。あと磁器は自分にあっていて惹かれる素材だったから変えようもりはなかった。シャープさや繊細さ感じを出せる自分の性格にあっていると感じています。

―― 「窓」というイメージは以前の作品と共通していますよね。

なんだろうね。客観的に見るとそういうのが何かなんだと思う。そこにあったであろう銅線を小金線とかを形にしたくて・・・だから磁器とかそういうものが好きだったり、そういうことが自分の中に潜在的にあって変わらないんだと。

［本の骨 05-8］（2005年）

―― 展覧会チラシの中央所辺の文章に「生身の自分を さが出ず」とありましたがいかがですか。

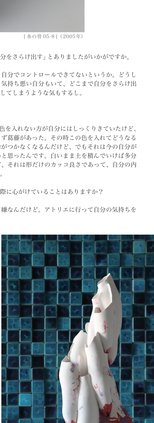
もっと見せたいんだけど、その出し方がまだうまく自分でコントロールできてないっていうか、どうしてもデザインしちゃうというか、それをやるからいる気持ち悪い自分がいて、どこまで出身をさらけ出せるかっていう葛藤なんだよね。直面できれを張い感じてしまうような気もするし。

―― 今後の制作がどうなるかの思い部分ですね。

今回色を入れたのはそのことが大きくて、今までは色を入れないから所自分にはしっくりきていたけど、色を入れることでそれが成立しなくなってそこでさまざま葛藤があった。その時この色を入れてどうなるのか、もっと色を入れてみようとか、だんだん最初がかからなくなるんだけど、でもそれは今の自分が入れたいと思っている感覚だから必ずあいかがいいと思ったんです。白いままを極んでいけば多分それはそれでカップコットのはずだけどなると思うけど、それは形だけのカップ良さであって、自分の内面や感覚がそこに乗っかっていないと思ったんです。

―― そうだったんですね。その他に控提制作する際に心がけていることはありますか？

今つくらないとつくらない自分が気持ち悪くなって嫌なんだけど。アトリエに行って自分の気持ちを切り替えることかな。



―― 長くやきものを続けるために大事なことは何ですか？

制作できる環境がちゃんとあるようこと。学生にいろ言っちゃうのは電に海卒業してから続けたと、続けたには何が必要か考えると、制作する環境を自分で整えるということが大事なわけで、あとは自分がつくりたいっていう意欲、そして仲間。ishokenの同期の仲間と中島先生や前田先生に出会って先輩達のグループにえれさせてもらったことをつねの自分があると思う。

―― ご自身にとってやきものの魅力とは？

やきものってとっても不自由な素材で、でも粘土という素材は自分というものを表現しやすい素材だと思う。そして鉄錆と絵成という自分の手腕がある。酸素とがったんだ状態で、また生のときと違う表情が見れるのは魅力的な部分じゃないかな。

―― 今後の展望は何かありますか？

今回色々な意見をもらってそれを踏まえて3月分の中から絞り出せるようにしたいなと思う。なるべくデザインしないように、結局人に見せるってことはデザインしなきゃ見せれないわけだけど、電に角ネココットはなくて自分が納得できるものを続けたい。

―― これからやきものの道を目指す後輩に伝えたいことは何ですか。

電に角、つくり続けること。自分のカタチがどこにもない見たことをしないカタチでみたならそれにこしたことはないけど、作家自身の本質でやっていかないということを伝えたい。だから、起点とな形でも、本質でつくられていれば、作品にオカラが出る。そういう向き合い方が足りてないと、借り物のカタチに留まって魅力的な作品にいたっていくことになると思う。本質が切っているというようなね。それが自分を向き合ってくるとかね。ホントは同じ作品に民映されたりするのは、細部に宿る強さと小細胞さとかっ作家の個性が出るんだと思う。



佐藤 雅之

1968年 新潟県生まれ。
1993年 武蔵野美術大学短期大学部工芸デザイン専攻陶磁コース卒業。1997年 多治見市陶磁器意匠研究所修了。
現在、茨城県立笠間高等工芸学校特命教授。
作品は岐阜県現代陶芸美術館、菊池寛実記念智美術館、茨城県陶芸美術館、牛田コレクション等に多数収蔵され、作家自身の本質でやっていかないということを伝えた。
主な受賞歴 第1回菊池寛実賞、第5回現代陶磁新潮社賞陶芸部門審査員特別賞、第11陶芸展新人奨励賞、第1回菊池ビエンナーレ優秀賞など。